

地域に息づく伝統文化

先人から脈々と受け継がれてきた伝統行事や伝統芸能、悠久の歴史の中で育まれてきた史跡や建造物などの文化財、さまざまな文化に彩られ、京丹波町の魅力は輝きを増します。

葛城神社曳山巡行

口 八田地域と高岡地域の氏子が五穀豊穡への感謝と豊作を祈願して行う「葛城神社曳山巡行」。八朔祭として旧暦の8月1日に行われていましたが、現在は10月中旬に開催されています。昼間は地域内を練り歩き、日暮れごろには葛城神社に集って境内を舞台に荒々しい姿を見せます。



質美八幡宮曳き山行事

樹 齢100年を経た杉並木の参道を、4基の豪華絢爛な山鉦と、子ども太鼓打ちを前面に三味線、笛、鉦が入る囃子屋台がゆつくりと時間をかけて巡行する「質美八幡宮曳き山行事」。巡行途中には伝統の祭り囃子が奏でられ、静寂の森の中に響く美しい音色が訪れた人々の祭り気分を盛り立てます。



和知人形浄瑠璃 和知文七踊り



「一」業一体の妙技が光る「和知人形浄瑠璃」。江戸時代末期に大迫村（現大迫区）で起こったと伝えられています。昭和60年に京都府無形民俗文化財に指定。一人で大ぶりの人形を操る「二人遣い」が特徴で、喜怒哀楽の感情を語り分ける「語り」、場面に合った多彩な音色を奏でる「三味線」、この三者が一体となって地元につながる物語などを切々と綴っていきます。

また、浄瑠璃の代表的な頭「文七」が名称の由来ともいわれている「和知文七踊り」は、浄瑠璃の物語をくずした内容であることから和知人形浄瑠璃とは兄弟分のような関係にあります。義太夫節を語る「音頭とり」と、輪並びした「踊り子」の手拍子と掛け声のみに合わせて踊るのが特徴です。

伝統行事で深まる地域の『絆』

和知太鼓

力 強いバチさばきと勇壮な響きで魅せる「和知太鼓」。源流となる「廣野太鼓の起こり」は、お伽草子「酒呑童子」に関わりがあるとされています。平安時代中期、天皇の命を受けた源頼光が大江山の酒呑童子という鬼の討伐に向かう途中に激しい雷雨に見舞われ、広野区の藤森神社で雨宿りをして出陣する際、村人たちが頼光の武運長久を祈願して打ち鳴らした奉納太鼓が始まりと伝えられており、継承される中で和知太鼓となりました。素朴な中にも人の心を鼓舞させる勇壮な響きを持っており、昭和63年に町の無形民俗文化財に指定されました。



さまざまな伝統文化

丹 波地域に伝わる「丹波八坂太鼓」は、江戸時代に牛の疫病が流行り、病退散の祈りを込めて尾長野八坂神社の神前で打ち鳴らしたことが起源とされています。昭和46年に地元の人たちの手で「尾長野八坂太鼓」として復興し、保存会が結成され、その後、「丹波八坂太鼓」と組織を変更し、現在は5月末に行われる「御田祭」や、7月の祇園祭での演奏、年一回の自主公演（毎秋の「DON」と来い/丹波八坂公演）などで披露されています。

このほかにも、「瑞穂音頭」や「丹波音頭」、「瑞穂太鼓」など、地域の人々に愛される伝統芸能が数多く息づいています。



丹波八坂太鼓



瑞穂太鼓



瑞穂音頭



丹波音頭

小畑万歳

即 興ネタで笑いを誘う「小畑万歳」。江戸時代、毎年正月から春先にかけて現在の兵庫県から三人一座の万歳が訪れ、各戸を回って芸を披露していました。その衣装と鼓が小畑区の民家に残っていたことから、昭和9年の安栖里区耕地整理事業竣工式で、同区の有志3人が播磨流の万歳を披露したのが近代での上演の始まりと伝えられており、平成13年には京都府無形民俗文化財に指定されました。台詞の中にその土地の風土や行事などの即興句を盛り込むのが特徴で、烏帽子に羽織袴で舞う「太夫」、鼓を打ちながらおどけ役を演じる「才蔵」、鼓の音に合わせて演奏する「三味線」の三人一組となって古典万歳を演じます。

脈々と受け継がれる伝統の『技』と『心』